

中西 皆さま大変お待たせいたしました。これから、国際日本文化研究センターの公開講演会を開催したいと思います。

ご案内のように、私も毎年一回こうした国際研究会を続けてまいりまして、今回で第五回ということになりました。今週の月曜日から研究センターにおきましてシンポジウムを重ねてまいりまして、きょうが最終日でございますが、その最終日を公開にいたしまして、公開講演会を催すことになりました。

今回のテーマは、ここに掲げてございますように「現代における人間と文学」で、ディスカッションを重ねてまいりました。例えば「伝統と現代」ですとか、「社会と個人」とかといったような小さなテーマを設けてまして、終日昨日まで議論をいたしました。大変白熱した議論が日々続けられました、かつ、世界の各国から多くの参加者にお出でいただきまして、国際的な実りの多い議論をしようということでございます。例えばドイツとかイギリスとかいう、従来からお招きしている国はもちろんですけれども、スペインですとか、ブルガリアですとか、そういう国々の方々もお招きいたしました。非常に国際的な色彩豊かなそういう会合を続けてまいりました。やがてそれは、書物としましてもお目にかげられると思います。

さて、それに続きまして、今日、このような公開講演を開催することを計画いたしましたところ、お忙しいところ多数お集まりいただきました。心から御礼申し上げます。皆さまのお出でいただきました中には北海道からお出でくださった方もいらっしゃいます。それから、東京からも来てくださった。大半の方は、この京阪地区でございます。

すけれども、そういう遠方からわざわざお越しただいてる方もいらっしゃる。私も感謝に堪えない次第でございます。

そういう皆さまを交えまして、これから三人の先生方の話をちょうだいするわけですが、どうか最後までご清聴いただきたいと思っております。

簡単ではありますが、これをもちまして開会の辞とさせていただきます。

それでは、最初に国際日本文化研究センター所長の、梅原猛から挨拶をいたします。梅原先生、お願いいたします。

梅原 本日は、お忙しい中をこんなにたくさんこの公開講演会にお出でいただきまして、ありがとうございます。

この公開講演会も、京都の慣習に、京都の名物になってきたようでございますが、今、中西先生が言われたように、これで五回目になります。しかし、昨年度から少し性格を異にいたしました。センターでやっている共同研究が三年間行われる。その共同研究の総決算として、シンポジウムが行われる。そのシンポジウムの最後を飾るものとして、この公開講演会を行っているというわけでございます。その意味ではこれで二回目でございます。昨年度は、埴原先生を中心とする自然人類学の日本人の起源というような問題におきまして、このシンポジウムで新しい学説が大体国際的に承認された。そういう講演会であつたと思えます。

今年は、中西進先生を中心とする共同研究で、「日本文学と私」というような共同研究を三年進めてきまして、今年は四年目でこういう

「現代における人間と文学」という題のシンポジウムを行いまして、そして最後のこの公開講演会になったわけでございます。

このシンポジウムについて、今、中西先生から少しご紹介がございましたけれども、大変質の高い世界の日本文学の研究者をほとんど全部集めて、そして四日間にわたって非常にレベルの高い討議をした。しかも日本文学というものを、文学ばかりでなくて民族学者や、歴史学者を交えて文学を広く見る立場で議論した。その中には、作家の上健次さんもまじって議論したわけでございます。私は全部は出席できませんでしたが、大変豊かな成果を収めたということでございます。やがてこの成果が、必ず本になると思いますが、その折はどうか皆さんお読みになっていただきたいと思えます。

そういうわけございまして、そういう形の第二回目の研究集会で公開講演であるわけでございますが「ちょうど昨今の今ごろ、桂坂の地にわれわれの国際日本文化研究センターの建物が建てられ」てから、初めて行うものです。

先日、このセンターについて、市民の方にも来て見ていただく機会がありました。自分のセンターを自慢するわけじゃないんですが、大変いい建物なんです。そんなにたくさん金がかかっていませんが、本当にいい建物でございます。場所も大変よろしいです。桂坂という地名が大変よろしいございますが、あれは本当は桂坂じゃなくて、本当は大枝町とか、大枝山とか、あるいは塚原とか、御陵町という場所でございますが、あんまり大枝山とか御陵町というのは名前がよくないというので、あれはあそこを開発しました西洋環境開発の人が、桂

坂とこういういい名をつけたのです。実は、これはある意味でインチキでございます。

あの場所は大枝山でございまして、うちのセンターの教授の村井康彦さんによりますと、夜な夜な鬼が出てきたのはどうもあそこらしいと、あの丹波の大枝山から鬼が夜な夜な京都に出るといことはあり得ないと、だからあの桂坂に昔鬼が住んでたのではないかと、われわれのセンターのあるところに、きっと昔鬼がいたにちがいないということを言われました。そういう昔の鬼の場所でございます。

また、御陵町というのは、どうも秦氏の墓がありまして、怨霊が出たというようなところでございます。そういう鬼とか怨霊は、私にはふさわしいかもしれませんが、それではやっぱり少し困るというので桂坂という名前をつけたのだらうと思えます。

そういう非常にいい土地に大変いい建物を、内井さんという方が設計されたんでございますが、実にすばらしい建物をつくっていただいた。どこか桂離宮の趣もありますが、どこかスペインの修道院のような趣もある。大変精神性の高い建物をつくっていただいた。これは、私は日本の大学や研究所の中でも、大変後世に誇り得る建物ではないかというふうに思うのでございます。

そういう立派なものをつくっていただいて、われわれの責任は重いわけでございますが、おかげさまでわれわれのところは共同研究機関でございますから、教授十五人、助教授十人、助手五人、そして職員五十人ということで、ほんとに組織は小規模ですが、大変活発な活動を続けているわけでございます。私は教授十五人、助教授十人、助手

五人という組織にしましたのは、研究室を縦割りにするとどうしても教授のご機嫌をとらなければならぬ。そういう助教授や助手たちが、教授のご機嫌をとらなくてもいいように、仕事さえすれば認められる、そういう学園をつくりたいという気持ちでありまして、そして十五、五と、だからいつもほかから血を輸入しなくちゃならない。新しい血を絶えず輸入しなくちゃならないというので、そういう組織をつくったわけでございます。

それで、私の原則として学閥や学派はつくらない。だから、私どものセンターは、教授でも京都大学出身ばかりではございません。京都につくった研究所は、とかく京都大学の植民地になる。私は植民地にはしなかつたんです。やっぱり独立自尊のセンターにしたい。そして、人材は広く集める。日本全国、あるいは世界各国から集めるというようなことにいたしまして、もう一騎当千の教授、助教授をお迎えしたわけでございます。

そして、今、活動中でございますが、われわれのところのもう一つの大きな役割は共同研究と研究協力、今研究協力には資料が必要でございます。図書も必要でございますし、そしていろいろ日本研究のデータが要る。そういう日本研究のデータについて、われわれは十年計画で作成しつつあります。

そういうわけでございますが、そういう資料が必要な方は、あるいは本をどうしても見たいという方は、研究所に来ていただくこともできます。ただしわれわれは図書館と違いますから、すべての人に見ていただくわけにはいかなのですけれども、研究者なら結構でございます。

ます。みずから研究者と名乗った人は研究者ということでございますから、皆さんどうか研究者と名乗ってきていただく結構でございます。どうか私どものセンターを見に来てください。

特に私どもの自慢するのは外国の日本研究の書物、外国人の書いた日本研究の書物などでそれらを全部集めようと努力しておりますから、そういう文献をお調べの方は私どものセンターを訪れていただきたいと思えます。

そういうわけでございますが、そういう日本研究をしておりますが、今年から文部省の重点研究というのがあたりまして、文明と環境という、これは私は今世界の一番大きなテーマじゃないかと、人類が一番直面している問題は文明と環境です。これをきちんと科学的に把握して、そしてその対策を立てることが人類の緊急課題だというふうに思えます。こういう研究を文部省に請求したところ、重点研究としてそれがあたりまして、われわれはその文明と環境という問題について、われわれのところでも今それを研究しているのでございます。これは、自然科学と人文科学が共同しないとできない。そういう文明と環境という問題には、自然科学の精密なデータが要る。自然科学だけではだめで、人文科学、社会科学が、どうして環境変動が起こったかと、起こった環境変動についてはピッチと自然科学のデータが把握するけれども、それはどういう文明と関係しているのかということとは、やっぱり人文科学、社会科学の課題であります。こういう諸科学の総合ということこそ、われわれの研究所の目的でありまして、今こういう問題に直面しております。私もその問題のために、九月から十月にかけま

して十日ほどギリシャ、トルコの旅をしてみました。

そういうことでございまして、われわれは確かに日本研究の機関でございしますが、この日本研究は私の信念によりましたらば、日本だけでするものではない。やはり今まで、大体ヨーロッパの文明を基準にしてすべて世界を考えた。この一つの座標だけでは危ない。たくさん座標が要る。これからの人類の未来を考える上においては、たくさん座標が要る。われわれは日本研究というもう一つの座標を掲げると、それをほかにいろんな文明というものを考えて、そしてたくさん座標の中から人類の未来を考えようというふうに私は思います。これは、表は日本研究の機関ですが、裏はやはりこれからの人類の文明の方向を考える機関であるというふうに、私は考えております。

そういう意味で、今十五本の日本研究が進んでいますけれども、それ以外に今文明と環境というそういう大きなテーマをもらいまして、これの解決にわれわれは実り豊かな成果を上げたいというふうに念願し、努力しているわけでございます。

そういうことで、われわれのセンターは活動しているのでございますが、先に申しましたように、この共同研究はたくさん進んでいるんですけども、この共同研究の中からいくつかを選びまして、毎年一つずつ国際シンポジウムを行って、最後に公開講演会をするということとでございます。今年も文学がテーマでございます。

この文学に関しまして、私は広く人材を日本に求めまして、きょうお話ししましたこの研究の中心になりました中西進先生、これは筑波大学から来ていただいたのです。東京大学出身です。それから、芳

賀徹先生、この方は東京大学から来ていただきました。それに杉本秀太郎先生、この方は京都女子大から来ていただいたのでございます。女子大は杉本さんを引き抜いたことについて、私を深くうらんでいるようでございますが、私はここで謝りますから、この中にも京都女子大の卒業生もいらつしやると思えますけれども、そういう人材をよりよく活用させていただいたのでございますから、お許し願いたいと思えます。

そういうわけでございまして、私は国文学界の第一人者と中西先生を思っていますし、また芳賀先生を比較文学界の第一人者だと思っています。それに、重鎮として杉本さんはすばらしいと思えますが、そういう人を迎え、助教授では上垣外憲一先生とか、鈴木貞美先生というような新鋭を迎えまして、日本文学の研究の一つのメッカにしたいというふうに、私は思っているわけでございます。こういう先生を中心に、三年間研究を続けて、今度のシンポジウムは世界の研究書、日本の研究書をたくさん国から集めて、そこにはめったに来られないスペインとか、あるいはブルガリアとか、そういう方も来ていただきますまして、四日間非常に精密な討論を行ったわけでございます。

最終日の公開講演でございしますが、この公開講演の講師としてわれわれは三人の立派な先生を迎えることができたのは、大変うれしい。ちやうど今お出でになりましたが、その最初の講演者が李御寧先生です。李御寧先生は韓国の文部大臣でございまして、実は梨花女子大学の教授で、私のとこの客員教授だったのでございます。そして、客員教授であった時期に、韓国の文部大臣になられまして、私どもとして

は現役の教授、あるいは客員教授から文部大臣が出るということは、これは大変光栄なことでございます。今後もなかなかないだろうと思えますけれども、やむなく韓国の政治のために涙をのんで客員教授を断念したわけでございます。

そういうことで、李御寧先生の仕事について皆さんよくご存じだと思いますが、李御寧先生は私と同じように哲学を研究され、哲学で現象学という学問がありますが、その現象学をおやりになって、その現象学の立場から日本論をやられて、有名な「縮み志向の日本」という非常に優れた本を書かれたのです。これは、日本人が思いもかけないような鋭い視野から、日本を見た。日本というのは縮み志向だと、小さいものに全体が実にくまなくという、「縮み志向の日本」という本を書かれた。これは、やはり私は不朽の名著だと、ルース・ベネディクトの「菊と刀」と並んで、やっぱり非常に優れた日本文化論として後世に残る名著であるというふうに思います。

李御寧さんは大変語学の天才でして、英語も、フランス語も、日本語もできると、まだほかにもできるかもしれません。そういうことで日本語が上手でして、冗談が特に上手です。一つの国語ができる人はたくさんありましょうけれども、その国語でまた冗談を言えるのは、きっと英語でフランス語でも言えると思いますが、大変私は語学の天才だと思います。語学の天才というのは、とかく思想性が乏しいものですけれども、李御寧さんは非常に思想性を持っていらっしゃる。私は、国際的に見てもすばらしい文化人だというふうに思います。きょうは、文部大臣の職にお忙しい中をわざわざ来ていただきました。深

く感謝いたします。

それから、もう一方のクライナー先生、この方はボン大学で長い間教授をされておりました。今は東京にありますドイツ日本研究所という、日本文化を研究するドイツの研究所の所長をしておられます。クライナー先生は、民族学、あるいは文化人類学というような学問をされた方でございますが、ドイツの日本研究者の代表のような方でございます。

実は、クライナー先生の師匠のスラビット先生という先生、まだご健在でございますが、その先生はアイヌ文化を研究した。斉藤茂吉なんかの友人でございますが、いろんなことから日本文化の研究を志しまして、最後にアイヌ文化を特に研究した。クライナー先生はそれに対して沖縄の文化を研究した。沖縄の文化を手がかりにして日本文化を研究した。日本では、アイヌ研究とか沖縄研究は、日本研究のごく特殊な日本研究というふうに考えられておりますが、クライナーさんのお言葉を拝借しますと、外国から見れば、あるいはヨーロッパから見れば、やっぱりアイヌ研究や沖縄研究は、日本文化研究の三分の一ぐらいの大きな役割を占めるんじゃないか、というふうなことを申されております。

私は、外国の日本研究者に教えられるのは、日本人が気がつかない新しい視野から、日本文化に光をあてている。私は、前から沖縄文化やアイヌ文化の価値を説いていまして、クライナーさんの言葉を借りると、日本文化を解く鍵がこのアイヌ文化や沖縄文化に潜んでいる、ということになります。きょうは大変いい話をお聞かせ

願えると思います。

それから、最後に遠藤周作先生、遠藤先生のお仕事については申すまでもないと思います。遠藤先生は非常にまじめな作家で、「沈黙」というような非常にまじめな問題を説いている、大変まじめな思索する作家だと私は思います。一方では狐里庵先生という冗談とユーモアを愛される先生でもあります。この二つの精神の秘密はどう解くのか、大変難しい課題でございますが、そういう日本を代表する作家、ノーベル賞候補にもなっているという遠藤先生の話聞けることは、きょうは大変幸せであるというふうに思います。

そういうことでございます。今回の公開講演会も三人の国際的な、韓国のアジアから、もう一つドイツのヨーロッパから、そして日本から、日本文学に対する新しいお話を聞けることを、われわれは楽しみにしているわけでございます。

それでは、みんな長くなるんじゃないかと思っておりますから、あんまり長くならんで終わりました。これで、私の挨拶は終わらせていただきます。と思います。